私の挑戦

三木市立三木東中学校　三年　若尾　凪紗

「ダレデモナイ子ちゃん」

この本の中で私が好きな言葉の一つだ。私たち人間は誰もが常に自分自身がここにいるということを誰かに気づいてほしい。もちろん、私もだ。誰だって「ダレデモイイ子」ではなく、他の「ダレデモナイ子」になりたいはずだ。

「アップステージ」は、私と同年代のシャイで内気な女の子シーラが、学校内のミュージカルを通して様々な刺激を受けながら成長していく物語である。

最初、「ダレデモイイ子」だったシーラは、あることがきっかけでミュージカルに不本意ながら出演することになる。しかし、シャイで内気なシーラは、自分には無理だと役をおりようとする。シャイでシーラと似たような性格である私には、とてもよく理解できた。今まで生きてきた世界とはまるで違う世界に入る恐怖。その世界でうまく生きていけるかという不安。結局、シーラは役を演じることを決める。とてつもない勇気を絞り出したのだろうと思う。それは、やっぱりシーラは心のどこかで「変わりたい」と思っていたからだろう。私とおなじように。

その勇気はシーラをよい方向へと導いた。シーラは今までの自分とは違う「別の自分」に気づき始める。舞台で役を演じている時に自由を感じ、幸福感に包まれること。一部の人しか持ち合わせていない「絶対音感」という才能をシーラ自身が持っていること。私はシーラに変化が起きていることに気づいた。最初シーラは、行動に移す前に自分らしいか、自分らしくないかを必ず考えていた。しかし、やがてシーラからはその姿勢は消え、代わりに何でもやってみようというポジティブな思考を持つようになった。それは今までの自分とは違うことをすることで「別の自分」に気づきたいという好奇心だ。私はここから学んだ。新たな別の自分に「気づく」ことは、自分自身に良い「変化」をもたらす。そしてその「気づき」を得るためには、自分にとって未知の世界への挑戦が必要であることを。

私はよく「やってみないと分からない」と母から様々な挑戦を強いられる。しかし、今まで自分の知らない世界への恐怖で、挑戦をなるべく避けて生きてきた。母と私は違う人間なのだから、考えを押しつけるのはやめてほしいと、母をうっとおしく思ってさえいた。言い合いもたくさんした。「私は私」なのだからと。私には無理、合わないと決めつけて、母が何度も「挑戦」を促すのかもまるで分らなかった。この本を読むまでは。しかし、母がしつこく私に挑戦を促すのは、私にきっと新しい自分を見つけてほしいのだということを理解した。

「自分の殻から出るというのはカメが甲羅から出てくる感じに近いのかも知れない。取り返しのつかない決断ではなくて、ただの試し。」

私はこれを見て、ハッとさせられた。私は今まで挑戦することを難しく考えすぎていたのかも知れないと。挑戦とは取り返しのつかないものではなく、自分でタイミングを決められるもので、タイミングが悪ければ準備できるまで待てばいいだけのものであることに気づかされた。この考え方は「挑戦」を私にとって簡単なものにしてくれた。

後半のシーラはこの考えに至って、ミュージカルでのハプニングで途中からヒロインの代役を演じることを頼まれ、その代役を承諾し完璧に演じきってみせる。最初のシーラだったら、私には無理だと投げだしていただろう。ちょっとした挑戦が彼女に「気づき」を与え、「変化」をもたらし、その変化が彼女を「ダレデモイイ子」から、他の「ダ

レデモナイ子」にした。

私は物事をついネガティブに考えてしまう癖がある。そのため、これまで挑戦という挑戦をしてこなかった。児童会や生徒会の役員に立候補することや、体育大会の応援団に立候補することなんて、とんでもなかった。でも、「ダレデモイイ子」のままでいたくはない。自分の知らない世界に飛び込むのは今でも恐怖を感じる。しかし、この本を読んで私もシーラのように自分の殻から出てみようと思った。そして、新しい「別の自分」を見つけ、変わりたい。他の「ダレデモナイ子」になりたい。そのため、小さいことから少しずつ「挑戦」していこうと思う。文化祭の合唱コンクールの指揮者への立候補はその一歩だ。そして、これからは少しでもやってみようかなと思うことがあれば、挑戦していきたい。私の人生をもう一つ上の段階へあげるために、アップステージするために。